庚子以前における完顔景賢の書画碑帖の収蔵について

下田章平

はじめに

清代の書画碑帖の収蔵史[1]で特筆すべきは、今日の故宮博物院の収蔵品の基盤を形成する清内府の収蔵品である。他方、中国の国土は広く、民間に儲蔵された名品も少なからずある。特に清末になると、賞賜によって秘府から書画碑帖が流出し、太平天国の乱（一八五〇―一八六四）、義和団事件（一八九九―一九〇一）といった度重なる国内の動乱は私蔵されていた収蔵品の流動化をもたらした。また、当時流行していた金石学によって、関連する書画や碑帖の収蔵熱は高まり、本稿で検討する完顔景賢（一八七五―一九三一。字は樸孫、満洲鑲黄旗の人。以下、景賢）などのような収蔵家を陸続と輩出し、彼らの収蔵品のなかには看過できない名品も数多く見られる。したがって、特に清末における書画碑帖の収蔵史は、清内府と私蔵された収蔵品の双方を検討することによって、はじめてその実相が解明されるといえよう。

しかしながら、清末の私蔵に関する研究は乏しく、近時、清末最大の書画碑帖の収蔵家と目される端方（一八六一―一九一一）の碑帖の収蔵に関する菅野智明氏の論考[2]によって、ようやくその端緒が開かれたといってよい。本稿は、上掲の端方とも親交があり、清末から民国期にかけて主に北京において活動した書画・碑帖・古籍の収蔵家として名高い景賢の書画碑帖の収蔵について考察し、当該期の私蔵の一端を解明することを目的とする。また、すでに拙稿[3]において、景賢の書画碑帖の収蔵時期について三期に区分するのが妥当であることを確認した。本稿では、紙幅の都合上、景賢が官場に出て間もない光緒二〇年代（一八九四―一九〇三）から庚子の年（光緒二六年、一九〇〇。以下、

庚子）までの第一期を検討の対象とする。

景賢の書画碑帖の収蔵に関しては、従来概括的に論じられたものしか見られなかった。[4] そこで、本稿では景賢に関する伝記資料をもとに庚子以前の彼の動向について確認したうえで、『三虞堂書画目』所載の景賢自注（以下、自注）や蘇宗仁按語（以下、按語）、同書掲載の収蔵品の遞伝の過程、関連する書画著録などをもとに、庚子以前における景賢の書画碑帖の収蔵について検討し、あわせて、景賢が書画碑帖の収蔵を始めた背景についても考察したい。なお、本稿で検討する書画碑帖は『三虞堂書画目』の作者と名称に従い、同書の排列順に整理番号を附した。また、景賢収蔵の原件と同定できたものは、注にその根拠を記した。

一　庚子以前の景賢の動向

庚子以前の景賢の伝記資料としては、景賢自筆の履歴単が最も詳細である。[5] 景賢の履歴単は二通あり、第一通は景賢三一歳時、第二通は景賢三二歳時のものである。二通の内容はほぼ同じであるため、以下、記載の長い第二通を用いる。併せて、崇実述・嵩申附記『惕盦年譜』（光緒三年、一八七七）、崇厚述・衡永編『鶴槎年譜』（民国一九年、一九三〇）も参照し、[6] 庚子以前の景賢の動向について検討しておこう。景賢の履歴単に、

景賢、現年三十二歳、係内務府鑲黄旗満洲連栄佐領下人。光緒元年、承蔭一品蔭生。二年、蒙恩賞、給挙人、准其一会試。十七年、遵海防例、報捐花翎。二十一年四月、経吏部、帯領引見、奉旨、著以文職用、欽此。是年四月、以員外郎、籤分刑部学習。二十三年四月、学習期満、奏留刑部補用。二十四年、遵新海防例、捐升道員、分省試用。是年九月、経原任、盛京将軍依克唐阿委充文案処幫弁。是年十一月、奏請以本班留於奉天補用。二十五年三月、経前護、盛京将軍文興委充文案処総弁。是年四月、給咨赴部、六月、経吏部、帯領引見、奉旨、照例発往、欽此。十八日、具摺謝恩、当蒙召見一次。是年八月、至省仍充文案処総弁。二十六年八月、試看一年、期満奏請、照例補用。

（景賢、現年三十二歳、内務府鑲黄旗満洲連栄佐領下の人に係る。光緒元年〔一八七五〕、蔭を承けて一品蔭生たり。二年〔一八七六〕、恩賞を蒙り、挙人に給せられ、其の一会試に准ず。十七年〔一八九一〕、海防例に遵い、報捐して花翎たり。二十一年〔一八九五〕四月、吏部を経て、帯領引見せられ、旨を奉じ、著して文職を以て用いられ、此を欽む。是の年の四月、

員外郎を以て、刑部に籤分せられ学習す。二十三年〔一八九七〕四月、学習期満ち、奏して刑部に留まり補用せらる。二十四年〔一八九八〕、新海防例に遵い、捐して道員に升り、省に分ちて試用せらる。是の年の九月、原任を経て、盛京将軍依克唐阿委ねて文案処幫弁に充つ。是の年の十一月、奏請して本班を以て奉天に留まり補用せらる。二十五年〔一八九九〕三月、前護を経て、盛京将軍文興委ねて文案処総弁に充つ。是の年の四月、咨を給い部に赴き、六月、吏部を経て、帯領引見せられ、旨を奉じ、例に照らして発往し、此を欽む。十八日、摺を具えて恩に謝し、当に召見を蒙ること一次たり。是の年の八月、省に至りて仍お文案処総弁に充てらる。二十六年〔一九〇〇〕八月、試看すること一年にして、期満ちて奏請し、例に照らして補用せらる。)

とある。これによると、景賢の生年[7]は光緒元年（一八七五）となるが、上掲『鶴槎年譜』光緒二年の条では、「……二月十八日、次孫景賢生、名会哥月。」（……二月十八日、次孫景賢生まれ、会哥月と名づく。）とあり一致しないが、景賢は公の場では、光緒元年を生年としていたと見られる。また、『鶴槎年譜』の同条に、「……後承継三姪華毓為嗣。」（後に三姪華毓を承継して嗣と為さしむ。）とあることによって、景賢は崇厚（一八二六―一八九三）の次孫として生まれ、のちに華毓（原名は華祝）の嗣子となったことがわかる（以下、完顔氏に関しては別表1参照）[8]。上掲『惕盦年譜』や『鶴槎年譜』の記載によると、華毓は崇実（一八二〇―一八七六）の第三子として道光二五年（一八四五）に生まれたが、同治一〇年（一八七一）に喉疾により早逝したという。彼は同治四年（一八六五）に葉赫那拉氏を妻とするが、実子がいなかった。また、景賢の生まれた光緒二年までに崇厚には衡平（一八五二―？）と三捷（一八五五―一八六二）の二子がいたが、三捷は早逝しているため、景賢の実父は衡平であり、実母は同治一二年（一八七三）に衡平に嫁した他他拉氏である。履歴単には「廕を承けて一品廕生たり。」とあるが、上掲『鶴槎年譜』光緒元年の条によると、実父の衡平は光緒元年（一八七五）に挙人となったばかりであり、景賢は生まれて間もなく亡き華毓の養子となり、崇実の「廕」によって廕生となったのであろう。翌年、上掲『鶴槎年譜』光緒二年の条に見えるように、崇実の死に伴う恩旨によって挙人の資格を得た[9]。そして、景賢は官場に赴くまでの間、完顔氏の家塾で学んだと見られる。完顔氏の家塾では武事を学ぶ以外は、基本的に漢族

の家塾と教学内容や方法は同じであったという。[10]

履歴単によると、景賢が官場とはじめて関わったのは光緒一七年（一八九一）である。この年、かつて崇実の幕下にあった繆荃孫（一八四四―一九一九）に、崇実の神道碑を依頼している。[11] また、崇彝『道咸以来朝野雑記』（北京古籍出版社、一九八三、三五頁）によると、廕生は二〇歳になると、吏部による帯領引見を経て、一品廕生は文官として用いられ、各部院の員外郎（従五品）として登用されるという。よって、景賢が実質的に官場に赴くのは、光緒二一年（一八九五）に景賢が員外郎となってからであろう。以後、しばらく見習いとしての任用期間が続き、新海防例にもとづいて捐納し、光緒二四年（一八九八）に道員（正四品）となり、盛京将軍の依克唐阿（？―一八九九）に呼ばれて奉天へ赴任している。上掲の庚子以前の景賢の履歴単を概観すると、彼の高級旗人としての矜恃を窺い知ることができる。すなわち、彼は「廕」によって挙人となり、さらに数度の捐納による売官によって、栄達の道を歩んだからである。

二　庚子以前の収蔵の経緯

庚子以前の収蔵の経緯としては、まず景賢が完顔氏伝来の書画碑帖を継承したことが挙げられ、殊に阮氏旧蔵品が見られることが着目される。147「宋拓漢華山廟碑四明未剪本大掛軸」（北京故宮博物院蔵）は標題にあるように四明本と通称されるもので、現存する唯一の原拓整本である。ここで147の遞伝の過程を見ておこう。147は阮元（一七六四―一八四九）の旧蔵品であり、147附阮元道光六年（一八二六）跋に、「道光六年、余携此碑至雲南、落水致黴、因傭滇工再装之。雲翁識。[12]」（道光六年、余此の碑を携えて雲南に至り、水に落として黴を致し、因りて滇工を傭いて再び之を装す。雲翁識す。）とあることによって、少なくとも道光六年までは阮元が所持していたと見られる。つづいて、何紹基「跋崇樸山蔵華山碑四明本」に、

甲辰使黔帰、阮賜卿兄、以此碑及泰山廿九字、質于余斎。己酉使粤時購去、云吾師欲観也。乃帖未至揚、師帰道山。賜卿以貧故、遂以帖帰崇樸山侍郎。樸山以駐蔵将発、属為題記。[13]

（甲辰〔道光二四年、一八四四〕黔〔四川省〕に使いして帰り、阮賜卿兄〔阮福〕、此の碑及び泰山廿九字を以て、余斎に質す。己酉〔道光二九年、一八四九〕粤〔広東省〕に使いせし時に購い去り、吾が師〔阮元〕観んと欲するなりと云う。乃ち帖未だ揚〔揚州〕

に至らずして、師は道山に帰せり。賜卿貧なるが故を以て、遂に帖を以て崇樸山侍郎（崇実）に帰せり。樸山蔵に駐せんとして将に発たんとするを以て、属して題記を為さしむ。）

と記されている。ここに見える「泰山廿九字」は上掲160「泰山廿九字篆阮元旧蔵本長幅」（所在不明）と推定される。147と160の両本は「泰華双碑之館」という阮元の斎号[14]からも明らかなように、珍重されていたようである。のちに阮元の子の阮福（一八〇一―一八七八）に譲渡され、阮元門下の何紹基（一七九九―一八七三）に質入れされた。何紹基は阮元に両本を贈ったが、彼はすでに没しており、再び阮福の手に帰し、崇実に売却された。[15] また、147附載周寿昌光緒八年（一八八二）跋に、「……光緒八年壬午春二月八日、完顔犢山宗伯崇申、携旧蔵「四明本華山碑」、過予小対軒。」（……光緒八年壬午の春二月八日、完顔犢山宗伯崇申は、旧蔵せし「四明本華山碑」を携えて、予の小対軒を過ぎる。）とあり、147の本幅には「景行維賢」白文方印一顆が鈐印されていることによって、崇実が光緒二年（一八七六）に没した後は、長子の崇申（一八四〇―一八九一）、さらに孫の景賢に継承されたものと考えられる。96南宋画院「糸論図立軸」（所在不明）の自注に、「絹本。阮文達題。戊戌秋、贈瑞景翁。」（絹本。阮文達（阮元）題。戊戌（光緒二四年、一九九八）の秋、瑞景翁（瑞洵）に贈る。）、また、111宋元人「宋元画冊拾翠」（ボストン美術館蔵[16]）の自注に、「阮芸台旧蔵。有総題。絹本。庚子失去、壬寅得回、惟失阮跋一頁。現存。」（阮芸台（阮元）旧蔵。総題有り。絹本。庚子（光緒二六年、一九〇〇）に失去し、壬寅（光緒二八年、一九〇二）に回すを得たるも、惟だ阮跋一頁を失うのみ。現存す。）とあり、96と111はともに庚子以前の旧蔵品で、かつ阮氏旧蔵品であることがわかる。上述した147や160の購入の経緯によって、96と111も崇実が阮氏から購入した可能性が高い。このほかに、『三虞堂書画目』には見えないが、李佐賢『書画鑑景』巻二、「楊少師神仙起居法巻」によって、楊凝式「神仙起居法」（台東区立書道博物館蔵）も阮元に由来する崇実の旧蔵品と判断される。[17] ただし、景賢の収蔵印が見られないため、彼に伝わったかどうかは定かでない。

ところで、なぜ崇実は阮氏から書画碑帖を入手できたのであろうか。王章濤『阮元年譜』（黄山書社、二〇〇三）によると、完顔氏と阮氏との出会いは崇実の父である麟慶（一七九一―一八四六）の時に始まる。嘉慶一四年（一八〇九）年一〇月、麟慶は最年少の一九歳で進士に及第、こ

の時に阮元と阮亨（一七八三―一八五九）に拝謁している（上掲『阮元年譜』、五一一頁）。阮元は乾隆から道光の間にかけて活躍した金石学の泰斗で書画碑帖にも造詣が深く、阮亨はその従弟にあたる。これ以後、麟慶と阮氏との関係はしばらく途絶えるが、阮元の晩年に再び交遊が密となる。[18] 麟慶著・汪春泉他絵図『鴻雪因縁図記』二、「緑野泛舟」に、

緑野阮雲台先生所題小舟名也。先生以大学士致仕帰里。文章・経済海内宗仰、余謹以再伝弟子之礼奉謁。適庚子三月三日癸巳、恰合上巳、又値寒食、相邀泛舟平山。[19]

（緑野は阮雲台先生〔阮元〕題せし所の小舟の名なり。先生 大学士 致仕するを以て里に帰る。文章・経済海内宗仰し、余 謹みて再伝の弟子の礼を以て奉謁す。適たま庚子三月三日癸巳、恰も上巳に合り、又た寒食に値い、相い邀えて舟を平山に泛ぶ。）

とあり、道光二〇年（一八四〇）、麟慶は致仕して郷里に戻った阮元に「再伝の弟子」として会っている。麟慶は道光一三―二二年（一八三三―一八四二）の間、江南河道総督（一時、両江総督も兼務）として江南に滞在したため（『清史稿』巻一九九、表三九）、阮元との交流はおよそ二年間と考えられる。したがって、麟慶と阮氏との親密な関係が子の崇実にも受け継がれ、阮氏旧蔵品が崇実にもたらされたのであろう。

次に、庚子以前の収蔵の経緯として、景賢が庚子以前に購入した書画碑帖が挙げられる。12高閑「草書半巻千文真蹟弓」（上海博物館蔵）[20] は、王崇烈の宣統二年（一九一〇）跋に、「樸孫都護得此巻於光緒戊戌。沈氏耦園旧物也。」[21]（樸孫都護 此の巻を光緒戊戌に得たり。沈氏耦園〔沈秉成〕の旧物なり。）とあるように、光緒二四年（一八九八）に沈秉成（一八二三―一八九五）の没後ほどなくして購入されている。86李成・王暁「読碑図双軸挂幅」（大阪市立美術館蔵）[22] は、自注に、「絹本。余旧蔵、己亥得。」（絹本。余の旧蔵にして、己亥に得たり。）とあるように、光緒二五年（一八九九）に入手されたものである。また、本幅には李佐賢（一八〇七―一八七六）の印が見られるため、彼の手を経たのちに景賢に帰したのであろう。104趙孟堅「墨蘭図巻」（北京故宮博物院蔵）は、自注に、「胡石査物。紙本。」（胡石査の物なり。紙本。）とあるため、胡義賛（一八三一―一八九七後）、もしくはその後人から購入されたものと考えられる。

このほかに、上掲86、121趙子俊「石勒問道図真蹟立軸」

（所在不明）の自注には「旧蔵」、109楊妹子題「馬遠山水真蹟中掛幅」（所在不明）、117趙孟頫「天育驃騎図巻」（所在不明）の自注には「旧物」とあるため、これらも庚子以前の収蔵品である蓋然性が高い。つまり、先に見たように86は光緒二五年に獲得され、121は自注に、「紙本。旧蔵。庚子失、而復得。」（紙本。旧蔵。庚子に失い、復た得たり。）とあることによって、このように推定されるからである。また、自注に「庚子に失去す」や「庚子に失う」と指摘のあるものも庚子以前の収蔵品と見ることができる。この点に関しては、以下で詳しく見ておきたい。

三　庚子以前の収蔵品散佚の経緯

庚子以前の散佚の経緯としては、まず高官への贈与が挙げられる。96は上掲の自注によって光緒二四年（一八九八）に瑞洵（一八五八―一九三六）に贈与されたことがわかる。瑞洵の妻は崇厚の第五女の桂芝であり（『鶴槎年譜』光緒二年の条）、光緒一二年（一八八六）に進士に及第、順天郷試同考官などを歴任した。また、110神宗「貴図真蹟長幅」（所在不明）は自注に、「……戊戌、送栄相。」（……戊戌、栄相〔栄禄〕に送る。）とあるように、光緒二四年（一八九八）に栄禄（一八三六〔三四〕―一九〇三）に贈与されている。この年に栄禄は直隷総督兼北洋大臣・軍機大臣を歴任している。よって、これらの贈与は、景賢が利禄を求める手段として行った可能性が高い。[23]

次に、庚子における散佚が挙げられる。3王献之「東山松帖真蹟巻」・6唐摹王羲之「嘉興帖巻」・10欧陽詢「正書陰符経墨宝巻」・上掲12「草書半巻千文真蹟弓」・20王詵「顕昌湖上詩蝶恋花詞真蹟巻」・29張即之「金剛経真蹟冊」・36趙孟頫「宝雲寺記真蹟冊」・52趙孟頫「陶詩秋菊有佳色帖一幅」・58元人「大観法書真蹟冊」・62祝允明摹「宋拓鍾王虞三家小楷真蹟巻」・81呉道子「観音像真蹟立軸」・上掲111宋元人「宋元画冊拾翠」・133柯九思「竹譜巨冊」・134曹知白「松陰高士図真蹟立軸」・149宋拓「欧黄庭経冊」・156宋拓「李北海東林寺碑原本」・162王羲之「十七帖南唐建業文房拓本巻」には「庚子に失去す」とあり、上掲121には「庚子に失う」とある。12は上海博物館、20は北京故宮博物院、[24]111はボストン美術館の所蔵であるが、現段階でそれ以外の作品の所在は確認できていない。

上掲作品の自注には、「失去す」や「失う」という記載があるが、必ずしも収蔵品の亡佚に限ったことではなさそうである。10自注に、「紙本。庚子失去。毀壊大半、惟存前題及「陰符経」三字、劫余現存。」（紙本。庚子に失去す。

大半を毀壊するも、惟だ前題及び「陰符経」の三字を存す。劫余 現存す。）、29自注に、「紙本。余物。庚子失去、現存三頁。」（紙本。余の物なり。庚子に失去し、現三頁存す。）とあるように、収蔵品の損壊を示す場合もある。また、111自注に、「……庚子失去、壬寅得回。」（……庚子に失去するも、壬寅（光緒二八年、一九〇二）に回すを得たり。）、121自注に、「……庚子失而復得。」（……庚子に失いて復た得たり。）、133按語に、「……庚子失去、為龐虚斎所得。景至滬購回。」（……庚子に失去して、龐虚斎（龐元済）の得る所と為る。景（景賢）滬（上海）に至りて購い回す。）とあるように、一時的な流出を示す場合もある。[25]

ところで、なぜこれほど多くの収蔵品が庚子に損壊・流出・亡佚の憂き目に遇ったのだろうか。『三虞堂書画目』、三虞堂論書画詩巻上に、「惜庚子変乱、余於奉天冬間失之。」[26]（惜しむらくは庚子の変乱に、余奉天に於いて冬間に之〔上掲3〕を失う。）とあるように、義和団事件（「庚子変乱」）がその原因であると考えられる。先に引いた景賢の履歴単に見るように、景賢は光緒二十四年（一八九八）九月から奉天で任職しており、当地で義和団事件に巻き込まれている。上掲12附載の王崇烈跋に、「……于庚子秋、失於瀋陽城中。」（……庚子の秋に、瀋陽城中に失う。）とあることによって、景賢は任地に収蔵品を携行していたことが窺われ、当地の混乱のなかで彼の収蔵品が失われたと推定される。なお、景賢には任地に携行せず、完顔氏の居所である半畝園に保管した収蔵品もあったと見られるが、管見の限りにおいて、『三虞堂書画目』等の文献に半畝園における散佚の記事を確認しえていない。

四　景賢の収蔵の背景

ここで、完顔氏の収蔵や学問について確認し、景賢が収蔵を始めた背景について検討しておこう。完顔氏の書画碑帖の収蔵の嚆矢は麟慶であり、彼の書画碑帖との関わりは、まず道光帝による4梁武帝「異趣帖真蹟巻」（藤井斉成会有鄰館蔵）[27]の賞賜が挙げられる。裴景福『壮陶閣書画録』巻一、「梁武帝深愛帖巻」（台湾中華書局、一九七一）に、

……景賢云、「其曾祖麟慶見亭公、在南河総督任、兼署両江総督、以河工安瀾被賜……」。

（……景賢云う、「其れ曾祖の麟慶見亭公は、南河総督の任に在りて、兼ねて両江総督を署し、河工安瀾を以て賜を被る。……」と。）

とあるように、4は道光一八年（一八三八）に治水の功により道光帝より賞賜されたものであるという。このような

清内府収蔵の書画碑帖の賞賜は、嘉慶帝にはじまり、道光帝以後は格段にその数が増えたという。[28]

つづいて、先に指摘したように、麟慶は阮氏との親密な交流のなかで書画碑帖に接している。例えば、上掲『鴻雪因縁図記』三、「康山払槎」に、

道光壬寅、花復盛、適余至揚。阮雲台先生邀往観。随歴数帆亭、陟観山台、循廊読安艤舟員外名岐、順天商籍、精鑑賞。所刻孫過庭「書譜」。

（道光壬寅、花復た盛んなるに、適たま余揚に至る。阮雲台先生邀えて往観す。随いて数帆亭を歴、観山台に陟り、廊を循りて安艤舟員外名は岐、順天の商籍なり。鑑賞に精し。の刻せし所の孫過庭「書譜」を読む。）

とあるように、道光二二年（一八四二）、清初の安岐が刻した孫過庭「書譜」を阮元とともに観賞している。このほかにも、上掲『鴻雪因縁図記』に金石学に精通していた潘世恩（一七七〇（六九）―一八五四）や龔自珍（一七九二―一八四一）らの序があり、また、同書、「拝石拝石」に、鐫刻家としても著名な銭泳（一七五九―一八四四）との交流を窺えることによっても、麟慶はこうした人物を通じて金石学を学び、書画碑帖に接していたと考えられる。しかしながら、現段階で確認できる麟慶の収蔵した書画碑帖は、『三虞堂書画目』所載の上掲4及び上掲『鴻雪因縁図記』、「半畝営園」・「拝石拝石」に見える半畝園の内装に用いられた清人の書画ぐらいである。ゆえに、完顔氏の書画碑帖の収集は、次に見る崇実によって本格化したということになろう。

崇実は上掲『惕齋年譜』咸豊六年（一八五六）の条に、「……時予専講金石之学、購覓鼎彝古器不少。」（……時に予は専ら金石の学を講じ、鼎彝古器を購い覓むること少なからず。）とあるように、この頃すでに金石学を研究し、青銅器を収集していたことがわかる。また、先に見たように、麟慶と阮氏との親密な関係が崇実にも継承されたようであり、阮氏旧蔵の名品が崇実にもたらされている。このように、崇実は書画碑帖を収集する一方で、金石学に精通しており、崇実のころまでには金石学が家学として行われていたことが考えられる。

以上のように、景賢に先行する麟慶や崇実によって、書画碑帖の収集が行われ、かつ金石学が家学として行われていたと見られる。ゆえに、こうした完顔氏の収蔵や学問を背景として、景賢は生まれながらにして、書画碑帖の収蔵家になるべき環境にあったといえる。また、実際に景賢は完顔氏より伝えられた収蔵や学問の素養を身につけており、

収蔵家として活動した当初から、書画碑帖の鑑識眼が相当備わっていたと見られる。事実、この時期に上掲の12高閑「草書半巻千文真蹟弓」や86李成・王曉「読碑図双軿挂幅」といった名品を獲得しているのはその証左といえよう。

おわりに

本稿では、景賢に関する伝記資料をもとに庚子以前の彼の動向について確認したうえで、自注や按語、同書掲載の収蔵品の遞伝の過程、関連する書画著録などをもとに、庚子以前における景賢の書画碑帖の収蔵について検討し、あわせて、景賢が書画碑帖の収蔵を始めた背景についても考察した。

庚子以前の景賢の動向について検討したところ、景賢の生年は諸説あるが、公の場では光緒元年（一八七五）を生年としていたと見られる。また、実質的に景賢が官場に赴くのは光緒二一年（一八九五）であり、光緒二四年（一八九八）以後、奉天に滞在していたことが明らかとなった。

つづいて、庚子以前の収蔵と散佚の経緯について考察した。収蔵の経緯としては、景賢が購入したものもいくつか見られるが、その多くは景賢が継承した完顔氏伝来の書画碑帖であり、特に阮氏由来の旧蔵品が着目される。次に、散佚の経緯としては、利禄を求める手段として高官への贈与が行われ、義和団事件の際に景賢の任地である奉天の混乱のなかで、収蔵品が損壊・流出・亡佚したことが考えられる。

最後に、完顔氏の収蔵や学問について確認し、景賢の収蔵を始めた背景について検討した。景賢に先行する麟慶や崇実によって、書画碑帖の収集が行われ、かつ金石学が家学として行われていたことが考えられる。ゆえに、こうした完顔氏の収蔵や学問を背景として、景賢は生まれながらにして、書画碑帖の収蔵家になるべき環境にあったといえよう。また、実際に景賢は完顔氏より伝えられた収蔵や学問の素養を身につけており、収蔵家として活動した当初から、書画碑帖の鑑識眼が相当備わっていたと見られることが明らかとなった。

注

（1）委細は拙稿「民国期における完顔景賢の書画碑帖の収蔵について」（『中国近現代文化研究』一一、二〇一〇、四四―八三頁）参照。

（2）「上海図書館蔵『匋斎蔵碑跋尾』初探」（前掲注（1））『中国近現代文化研究』一一、一―四三頁）。

（3）「完顔景賢撰・蘇宗仁編『三虞堂書画目』について」（『汲

古』五七、二〇一〇)。

(4) 外山軍治「明清の賞鑑家(続)」(『書道全集』二四、平凡社、一九六一、三三―四〇頁)、張伯駒「北京清末以後之書画収蔵家」(張伯駒編『春游瑣談』巻一、中州古籍出版社、一九八四、一―四頁)。

(5) 秦国経他編『中国第一歴史檔案館蔵清代官員履歴案全編』七(華東師範大学出版社、一九九七、四六五・五〇三―五〇四頁)。

(6) 『惕盦年譜』は『文文忠公自訂年譜 惕盦年譜』(年譜叢書、広文書局、一九七二)、『鶴槎年譜』は『北京図書館蔵珍本年譜叢刊』(北京図書館出版社、一九九九、一〇二―一八八頁)。

(7) 范鳳書「金源完顔最富蔵娜嬛妙境三虞堂」(『図書館雑誌』一九九五年第一期、五七―五八頁)では景賢が同光年間から民国初期まで活動した人物とし、謝巍『中国画学著作考録』(上海書画出版社、一九九八、六九一―六九二頁)では生年を道光二八―三〇年(一八四八―五〇)の間と推定するが、穏当ではない。

(8) 別表1は、古市大輔「崇実・崇厚の諸子とその配偶者に関するノート―清末中国における完顔氏の婚姻関係の一齣―」(『金沢大学文学論集』史学・考古学・地理学篇二八、二〇〇八、一―二〇頁)所載、「清代北京完顔氏系図」の麟慶以下の引用。ゴシック体は配偶者、斜字体は完顔氏の女性、「男」「女」は名前が不明な者を指す。

(9) 『北京市志稿』選挙表下、清光緒五年(一八七九)の条(北京燕山出版社、一九九八、三七三頁)に、「景賢、満洲鑲黄旗人、文生。二百三十名。」とあるが誤りか。

(10) 杜家驥『八旗与清朝政治論稿』(人民出版社、二〇〇八、三八七―三九六頁)。

(11) 繆荃孫「盛京将軍兼奉天総督完顔文勤公神道碑」(『碑伝集三編』巻一四)による。一方、繆荃孫『芸風老人日記』(北京大学出版社、一九八六)には、光緒二五年(一八九九)四月六日に撰文を終えており、何らかの事情で撰文は遅れたようである。

(12) 『宋拓華山廟碑三種合璧』全三冊(大阪府立中之島図書館蔵、有正書局、刊行年不明)。

(13) 『東洲草堂文集』巻八(近代中国史料叢刊、文海出版社、一九七三、二九八―二九九頁)。

(14) 王章濤『阮元年譜』(黄山書社、二〇〇三、八頁)。

(15) 前掲注(6)『惕盦年譜』咸豊七年(一八五七)の条、147附載何紹基咸豊九年(一八五九)跋にも見える。なお、何紹基「題四明本華山碑為崇樸山作」詩(『東洲艸堂詩鈔』巻二一、続修四庫全書第一五二九冊(上海古籍出版社、一九九五)所収同治六年(一八六七)長沙無園刻本)に、「粤輜将発始返璧、選楼未至驚騎箕。」とある。何紹基にすると、これは師である阮元への「返璧」と見ていたようである。

(16) 呉同編『ボストン美術館蔵唐宋元絵画名品集』(ボストン美術館・大塚工芸社、二〇〇〇)に「樸孫心賞」白文方印

が見られる。

(17) 前隔水の絹上に「平畝園珍蔵書画之章」朱文長方印があり、崇実の収蔵印と推定される。中村丙午郎（不折）『唐撫晋帖月儀 楊凝式神仙起居法』（孔固亭真蹟法書刊行会、一九三四）参照。

(18) 『阮元年譜』には道光一九年（一八三九）に二項（九四一・九五三頁）、同二〇年（一八四〇）に三項（九五五—九五六・九六九—九七〇頁）、同二二年（一八四二）に一項（九七七—九七八頁）が見え、『鴻雪因縁図記』第一集に阮元の序がある。

(19) 以下、底本は道光二九年（一八四九）揚州刊本（北京古籍出版社、一九八四）。

(20) 葉恭綽『遐菴清秘録』巻一、「唐僧高閑千文真蹟巻紙本」（太平書局、一九六一）に「小如庵秘笈」朱文方印、「完顔景賢精鑒」朱文方印が見える。

(21) 前掲注（20）「唐僧高閑千文真蹟巻紙本」。

(22) 大阪市立美術館編『大阪市立美術館蔵中国絵画資料編』（朝日新聞社、一九七五、一三頁）に、「完顔景賢精鑒」朱文方印、李佐賢の「李佐賢印」朱文方印が見える。

(23) 萩信雄「清末の金石学と収蔵家の一側面—金石の収集に奔走した学者・大官」（『季刊墨スペシャル』二一 碑法帖・拓本入門、一九九四、一三八—一三九頁）。

(24) 『故宮博物院蔵歴代法書選集』三—三（文物出版社、一九八二）に、「完顔景賢精鑒」朱文方印、「樸孫庚子以後所得」朱文方印が見られる。

(25) このほかに、12と20が挙げられる。12は前掲注（20）「唐僧高閑千文真蹟巻紙本」、20は裴景福『壮陶閣書画録』巻四、「宋王晋卿詩詞巻」参照。

(26) 『三虞堂書画目』、三虞堂論書画詩巻上では、「……失於庚子閏秋間。」に作る。

(27) 藤井善助『有鄰大観』一（有鄰館、一九二九）に、「小如庵秘笈」朱文方印、「景行維賢」白文方印、「金章世系景行維賢」白文長方印、「景長楽印」白文方印、「異趣蕭斎」主文方印、「任斎銘心之品」朱文方印が見える。

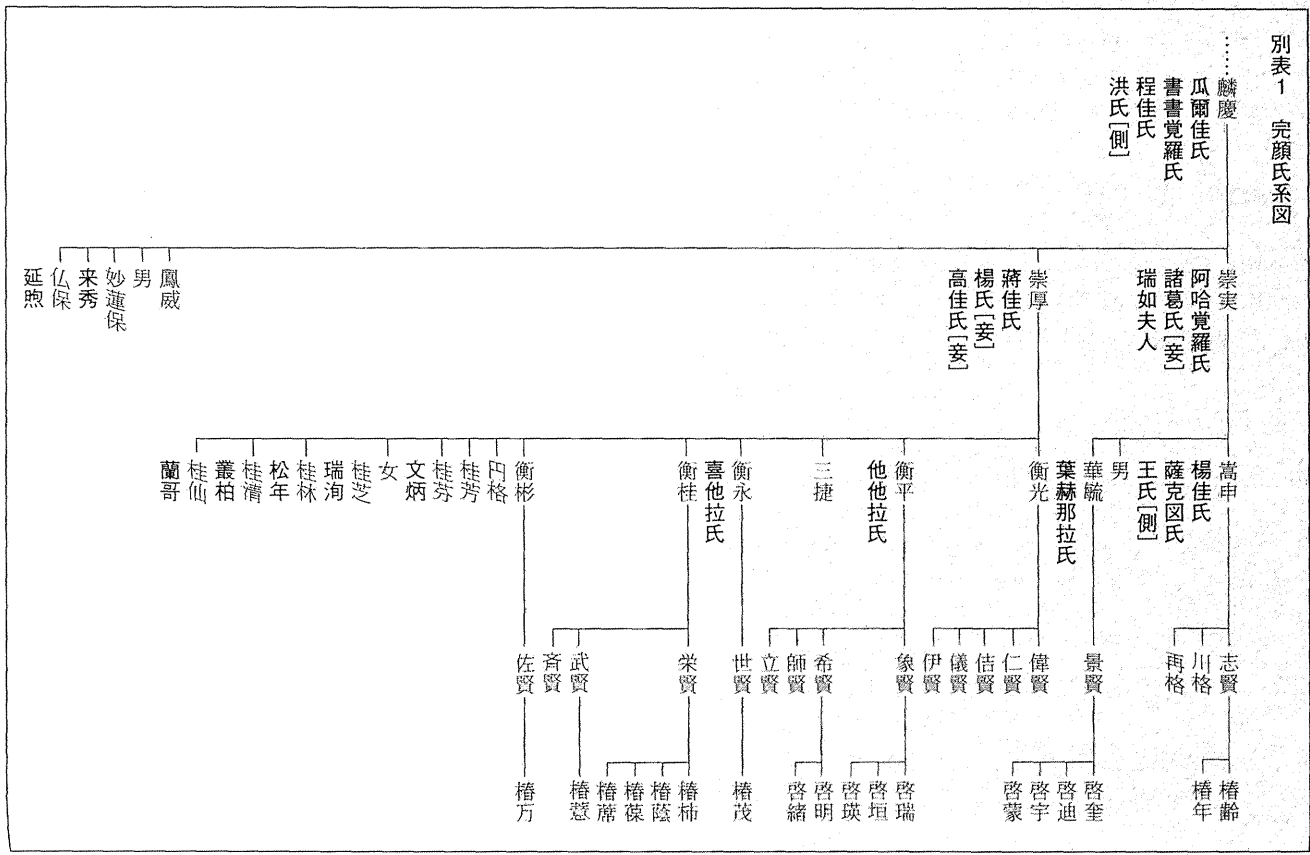
(28) 楊仁愷『国宝沈浮録—故宮散佚書画見聞考略』（上海人民美術出版社、一九九一、五五—六一頁）。

附記

本稿で用いた『三虞堂書画目』は台湾の国家図書館、『宋拓華山廟碑三種合璧』全三冊は大阪府立中之島図書館のご厚意によって複写を賜った。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

（福島大学非常勤講師）

別表1　完顔氏系図


……麟慶
瓜爾佳氏
書書覚羅氏
程佳氏
洪氏［側］
崇実
阿哈覚羅氏
諸葛氏［妾］
瑞如夫人
高申
楊佳氏
薩克図氏
王氏［側］
男
華毓
景賢
啓奎
啓迪
啓宇
啓蒙
志賢
川格
再格
椿年
椿齢
崇厚
蔣佳氏
楊氏［妾］
高佳氏［妾］
衡光
葉赫那拉氏
偉賢
仁賢
佶賢
儀賢
伊賢
衡平
他他拉氏
象賢
啓瑞
啓垣
啓瑛
啓明
希賢
啓緒
三捷
師賢
立賢
衡永
世賢
椿茂
衡桂
喜他拉氏
栄賢
椿柿
椿蔭
椿葆
椿蓆
武賢
椿蕙
衡彬
斉賢
佐賢
椿万
円格
桂芳
桂芳
文炳
女
桂芝
瑞洵
桂林
松年
桂清
叢柏
桂仙
蘭哥
鳳威
男
妙蓮保
来秀
仏保
延煦